

863  
89



国立国会図書館 タイトル『もゝとせ集』 請求記号 863-89

ガラス使用





もくとせ集の引

わいせれん



鼻祖芭蕉の羽ハ生涯草衣一葉の蔭ト

丹一勇力を後つゝあつゝうこ言と娘年れ

恒家の志のいふかといもあふ後ひり止

世に流るべからし月の清影りゝ馬の影をふ

以て春人花をよ懐ととるゝ西ノ折

月の影ふかきも東ノ行水入日お影も

不傳ふかきりえ詠七甲戌の福をふ

美一









新彼其余光を継ぐ己の一年一己の  
向ふと書はしむくは羽の生かすと思ふ  
又中一ふ心の空ふく世傳の人の世傳  
只天工自然のお景の暮るに生来時属改  
川陸日徳我と或い山人ふ花さきぬや  
いふおまゝにさうとこあつて行  
さ知しむりも風流あるはななく福下  
一いふやん高く世を覆ひしむありん  
き一帯一くは後まよひとて勅を踏たう

之す一く志を継ぐ一人の魂をおる月乃  
おらもはこら連綿とおこふり事一を  
歎一いふ小冊子の月あふ楊子筆を  
採く其意傳をこわく敬く  
P 末

千時寛政四のと一主小孟を  
ふの菴秋心





追福百韻

昔夢ノ骨枯也今亦性空也

小童乃乞食也雨者宿也

制札毛活もれ代書り筆折り

若くは名を起すまゝ一茶

蹴瀧の池えいこれ中子何と

祥 ちつやと柳のふりや兒

掃 まくく葉 露も月のゆき露

て 潔く 鬱 涙 あり

木瓜

波 靜

楚 流

吳 詠

五 嶺

素 香

柳 條

圓 瓜



吳詠



其頃とろろな度者 司百  
 曲尺と懸者 尺の同邊  
 何事も廊のうらき 心とるり  
 赤かふき川 田と水原の根分  
 多ふも 他生の縁とこり合  
 舟の崩れ 心る者や  
 藍瓶の尋一 剛毛のうら上  
 歌の母なる 清所の浄使  
 年ふふふぬ創一の月僅し

卓花 龜餅 麦汁 一花  
 梨風 雨橋 左丹 桐雨  
 其白

寄らば 涙も 朱櫻 朱折 花  
 出代 みる見 割中 別物 寄る  
 早きと 懐ふ 思ふ さらう 花  
 花うら 花の 日 和の 花うら  
 橋 高くと 水 糸うら 長 婦  
 二 徳の 尾と ころく 夜の 花 返  
 おあしき する 流 宜の 返 返  
 やうつと 花を 又 あしき 返  
 花、引き 返の 涼しき

巴流 里塘 杉川 暉常  
 汁南 磨眼 鹿子 千  
 鶴之





ひしき君怖い中々星まじり  
了りしと乱る残る殿  
焚付く馬とく眠まは彌ふ成  
軒端もとま氣の泣れ紫屋  
松ふ月の虫もく入るり行し  
つらつら系次 中書君の言え  
懐中の脇付了拂い柄川  
只ま白ふ内陣 寄る  
半輪の月も来れ山かほり

石牛 恭阜 長布 花英 御光 暮蟪 東李 鳥光 書雅

旁と居替り候々寄細代本  
まま物重移り馬の手旅  
一人高一人とら明もせ乱  
葉の下も細いさうのほもく  
雷林本ふ日斜たふし  
今前ハ多ふく 袂 之  
名ふい 吟歌ふ湯川芋の依  
流す為き善誰ふあー奉加帳  
夏の上とん 新綿 寄る 虫

晋佐 仙子 渭南 五津 如行 里嶋 登水 書言 文宣







るをきつるも月毛きつるも  
ことし使のさし一可く  
岸持のお舟一長きと船  
能い日あきくも住持一廣  
學少くの子の所ぬ所  
認くの時あきく一待  
和睡く續く聲入買入  
青衣層ふなる  
又きくもきくもあきくも鮮者

二 淵 有 鯉 年 路 兔 園 伏 示 沙 野 如 岡 宗 著 山 昂

草臥道の抜引く序  
喜風ふ誘ひさる羊ぬけ  
清も霞も自あう記相  
所植の花も蒼し椽入先  
世間約すすも律者境界  
川初ふ流も水中者一日路  
糸のしり種くも入あきか  
去中へ古才葉椽の中及境  
度之長の家をくこれ強居也

山 昂 呂 中 我 后 恭 義 東 林 連 舎 寬 志 古 行 不 及





池の蓮は花はとて青をとり  
露を草履毛道具第うら  
耳の中は花のぬきとてあまのこ  
をまふふまゝと梅はつと  
るはくとふ月を記す川の風  
城下へ出ると入ると梅  
字より中を齋へつとて毛糸城  
宿へ續つて手書り暇を  
釣橋の一とて字くると返る

南枝 徐来 里杏 中和 吟吟 谢人 後有 花明 東張

生哉 生贖の昔あはゆすはたけり前  
縁えふれと青川小娘  
深おも心ふと川ふ極 戸あ  
同もあつとふ郎 走多らり  
川果つるとふと山縁  
あををあつとふと 木若かり

長邦 影如 短牛 久江 糸氣 東翠 宵之 恭家





時より言ふを言ふ事花供養  
静くも言ふ事花供養

霜後  
波景

諸家 追福く吟別録号

四季之吟

陽光も移行く人あり肩あり上  
琴響の遠くほしひりて水了れ  
川にさうも夏の事水うれ  
空将も角りい怖るる事の橋

暉常  
恭哉  
夏晴  
冠幸

川将も根を地す一所もく  
一羽常く飾の事一きこむか  
かきもよも誇るよ記 作り万  
若井も植ぬ濠もよよとよ  
毛川の水も深くと茶のたれ  
堀端も諸居の人あり鼻の先  
因西の家を見知ぬたるとこれ  
まゝも新しきと毛淋し野の事

亀鶴  
稲光  
蒲夫  
千夫  
文輝  
羽貞  
柳條  
水川

合





一よけり影の替り葉摘られ  
水底より小人の動く水結了目  
葉の葉の意なきもくも下園  
盗人奪り大根ふ多し小根くも  
穂もあらしきぬ日飾り夜の花  
月より丸く望みの崩れおきしん  
白のあらしの浪波や天をうけ

巨仙  
萬嶺  
朱雁  
中  
鈴吳  
雨柳  
珠

草くちり宵のい署ーとくろん  
節一と花ふ多し捨り庵れう  
花四毛獨活も清く清水うれ  
海より白の曇りや神く  
けり葉や橋を旭や花はく

大菊  
山江  
秀外  
飛津  
東鳩

新暮の葉の影もるは白しうれ  
さるから言はれ多し一外の花  
字のくくと盛りさるるは常葉

遅子  
何丸  
秋人



山くさきと川あきとまじらふ

秋苑

雪の日も竹も自在を直りて

鷹眼

かけもよむ清く流るる長堤

亀醉

秋の日の梢も長きまみらふ

麦河

雲とくも 梁も今も残りや産

瓢香

虫の音のまをたれりや分た

手月

暑さも毛解ぬ氷の心太

女  
柳子

清く流るる水もくも肩うれ

星瓜

葉家うらやましくゆくるを郭に

柳尾

世を憂ふとあはれとに庵も水鏡か

一汗

古井へ下りて音もあつた

波景

竹根も動く物も氷うれ

儂山

葉の蒼さを花も日暮了る

冬瓜

花は根もまじりて木槿が

相馬

翁も氷の氷も金もあつた

巴流

何もある葉の雨もあつた

馬下



お下り行まふもろしきうさ  
表家うさまの葉内わ菊の花  
蓮枝くし子青あ家町るうれ  
小まふ毛入日の長き枝中下  
色ふをる眼の見くはれく紅葉うれ  
山吹わ夏のもしをる夏をま  
かき流ふわ流止まろく行日のお  
余の流はくもまぬね花が

里塘 藤子 千下 杉川 羽橋 左丹 白山 困孰

可晴ち野の草莖日ふき  
寒く葉わあまりのいんれ草の骨  
水と水隔をぬす氷うさ  
水きわ水を流す下羽つく息  
水ゆむろくしあく行田埋が  
むくくし雲うくぬり青丸  
枝まろく長し短し糸糸  
産かろ見えんあま流し  
維子るくわあ子郵く里の家

敵蹤 茂陵 鳥夕 義由 如氷 里羊 鞍片 心文 可情



海山の色を待たばはつ時雨  
行旅のいほりしを記 海の音  
垣とふい 霧の暮羽は秋の風  
あはれ 泣の替へぬ物お木の葉  
さよのそれお山吹の原の雪は  
まをわわ 時をふさぬ花の色  
橋と行く 春をのさす 夜の空  
まをわわ 時をふさぬ 雲の衣  
蒼うら 暮をふさぬ 花の花

那 風  
松 石  
津 棧  
ト 乙  
和 夕  
葉 色  
玄 圃  
梨 風

式羽生

蒼うら 暮をふさぬ 花の花  
霧の暮羽は秋の風  
あはれ 泣の替へぬ物お木の葉  
さよのそれお山吹の原の雪は  
まをわわ 時をふさぬ 雲の衣  
まをわわ 時をふさぬ 花の花  
蒼うら 暮をふさぬ 花の花  
霧の暮羽は秋の風  
あはれ 泣の替へぬ物お木の葉  
さよのそれお山吹の原の雪は  
まをわわ 時をふさぬ 雲の衣  
まをわわ 時をふさぬ 花の花

我 后  
暮 蟬  
花 葉  
仙 子  
思 南  
五 津  
里 修  
東 孝



林三

門前ハ雪ハ舞ハルルハ花雪也  
策乃戸ハ雪ノ下ニ遊ルルハ黄昏  
雪月ハ動ルルハ地ノ雪也  
ち〜〜ハ雪ノ下ニ遊ルルハ  
旭ノ雪ハ輝ルルハ雪ノ下ニ遊ルルハ  
啼ノ雪ハ遠ルルハ雪ノ下ニ遊ルルハ  
行ルルハ又人里ハ山ノ下ニ遊ルルハ

自光  
如  
和  
元  
竹  
文  
補  
冬  
西

卯ノ雪ハ雪ノ下ニ遊ルルハ  
雪ノ下ニ遊ルルハ雪ノ下ニ遊ルルハ  
草ノ雪ハ雪ノ下ニ遊ルルハ  
月ノ雪ハ雪ノ下ニ遊ルルハ  
雪ノ下ニ遊ルルハ雪ノ下ニ遊ルルハ  
日ノ雪ハ雪ノ下ニ遊ルルハ  
日ノ雪ハ雪ノ下ニ遊ルルハ

兔  
巴  
落  
柳  
雪  
言  
馬  
幸  
雅  
白  
四  
尾



駐めしむる出多れと先毛可るれ

上之邑

五峰

風もたふしく涼き中なるあり

池守

其朴

琴奏す別ありとくも二行宛

小棚

年くお都く高き水空うれ

左束

湖有る下より多し今おのを

西杉

かた目もつりて種もわ海空う

南行

率叩

淋しきいゆ海とく風えと水のそ

上中系

其葉

雪おろす志望の夕や早ふ平

水泉

風乃日暮千るるや川を曲り取

江家

妻

所く涼きいゆ海とく風えと水のそ

一

瓢

蘇かき喜しく色や細豆汁

系小

干棚

た月言や/妻の松也わ雨く手書

小汁

夷志

秋中川わ涼き夏行く白帯

下忍

路長

野のたゆや帯の散るく物

巴陵

青嬉し一町を菊や石障子

下中系

祇木

あやうしく冷めて清涼や傳月

其川





村

宿書やちのるる物おほく行く

きしつたふたふたあそくち花ゆらぬ

紅唄いと見まもあるふきらしす

鶴の舞、流、山後、若ら、若ら、若ら

大勢子、足、若、若、若、若、若、若

かき、若ら、若ら、若ら、若ら、若ら、若ら

志く、若ら、若ら、若ら、若ら、若ら、若ら

草も、若ら、若ら、若ら、若ら、若ら、若ら

式程

止山

呂中

山月

田保

若美

若美

貴十

大田

永田

溪谷

芝紅

自古く月待る月お菊若らぬ  
新あつた青花地る花をんぬれ

千種さく地を一色お枯地が

そとちく、案内もへぬけ干が

芝浦の海若も深々む村をみら

あつた、所、日の帰る、若ら、若ら

あつた、家、月、の、若ら、若ら、若ら

吹、晴、若ら、若ら、若ら、若ら、若ら

武金川

連金

若白

豊鼎

範路

心多

心多

山





徳松戸書斎連

眺入る所は極老の寸面  
 此れもいふもいふもぬ梅の白ひうれ  
 水もや捲く親する三折の端  
 身自やこよひ行徳多師の人  
 床一さおこのころ菊乃畑  
 忌替く衣毛芳一菊乃目  
 草うりや芝踏むく人うら  
 羨細く夕日一丁草花曲うれ

長布  
 定雅  
 雁松  
 千里  
 思水  
 亀玉  
 草花

石地籠もくく覗く如紫うれ  
 身も如野毛群く日暮うれ  
 行水や橋系の方老音  
 地老も尺巾の明書社や友古立  
 八朝や老も川竹も明あゝ香

雨鳥  
 舟夫  
 周志  
 常安塔  
 多岸  
 流楚  
 清水  
 以水  
 香代

菊也くや島也く月も千様ほと

一命





抄

煤くふ赤土の嵐を吹く  
宮子も草屋の表を海を雪  
菊のちりし秋を居る也初一作連

勢津 理玉

勢紫 柙也

真之川 急性

勢久辰 之羅

禁断の場を赤土を赤土に  
陽もわ帳を巻く所をう上

秩父一田 紅紫

芭江

菊の時の姿見をきく花火の如

片江

秋の山をゆくわ花はほほ

渡江

子らとをハ碎ししは地を花

柏江

晩清を中め日まき花りし

秀哉

引くるやをきく漁火の明残り

危遊

八月の影をを淋し鹿をを

草危

川音の高くありし夜をうれ

舊路

万菊の八日書をを化糖を

楚雲

葉の花をわををををを

梁野

水の流も確をし一連は九

江魚

合し





ナ

石の口とく音あはれ月珠  
行咽ハ毛も滑出く流山うれ  
初あや第目蒸た黄あうる

相浦賀

鍊石  
十洲  
棧尺

能者風親る節衣をよれたく空

甲子出

石片

白や樵まの素あうる髪

竹身

暑き日や乾瓢白記不考り上

旭身

いとつよの眼ふく川城考る老うれ

菖力

竹巻

雲の霞ふくま書まてく山後の水

二日中

一古

流るる水く思ふ神れ屋あうれ

常瀬来

鏡如

馬ふゆ草も身れ花甲うれ

鉾田

古仙

行林や草もまうて虫のうれ

素野

古中のあぬかふも雪の佳うれ

醫之

ゆらるるいせと歡ふる人こ名

安食

其白

まふも又草の園うりく涼うれ

三邑

東林



初半若人、遠ふく水勢うれ  
女日とい限、ぬきき、牡丹うれ  
白菊も若く菊もかき、月夜うれ  
秋の夕もあつ、くも夜きか  
雑にや嵐を会所、あはれさう  
側もある花、い胃のあはれ  
地を懐ふ水、一編やあみあみ  
白晴く光、あはれあはれ夏の白

武蓮谷

素秋  
中和  
徐来  
不及  
里吉  
龍之  
古行  
南枝

影見も人、あはれ思もぬ、色蓮うれ  
青い影もあはれ、くもあはれ  
福の、あはれあはれあはれ  
茶の、くもあはれあはれあはれ  
追もくも、あはれあはれあはれ  
青もあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれ

素十  
里翠

松翠  
東翁

素十

本碧  
松叙

白若

凉波

六一





草大根を是うう旨く食ふ霜  
不取るも男と慕ふ角力うれ  
掃 ちあれ薪の中を移さふ  
命 のくれや園を雨くさ垣をえ  
まいれおちう一途きの屋敷のれ  
山草花や百年先を咲かす  
昂くくすれ庭もよき屋敷のれ  
若くきの果も同ゆきま葉山子が  
海しき不二の糸ゆふく

牛色 有之

幸手 文宣

栗橋 宜蘭

頭丸

青牛

樗山

水次

月指

中田 雨川

消えぬ缸の根うらやうれ  
聲ゆくを半分を色遣了前

吉打 雨矢

大白

馬池子 関二

芦帆

諸江

白圭

里雄

晴枝

初あはら暹さ久の宿皆夢葉うれ  
小夜あはる川もあはる毛旅者有  
あまの香不見ぬ人旅一住所  
葉のくれおちく庭ま字治のや  
けりりも千色啼き川ゆりね  
燗 湯の池の行旅を終子の序





あまの毛 神宮も行く可るうか  
花も狂ふ髪の花さきもれ

芦原  
奥山

忍城

小春も毛 神宮も行く可るうか

青我

一節も 洞 残れ 法 の 氷う 目

魯道

平舟も 耳も 残れ 郭も

古雅

朝も 行くも 五日の 残れ

毎涯

一夜も 友 啼 残れ 哇うれ

星羅

花守の 第も 四日 花 暮の 暮

山水

更なる 山音 高なる 夜をうれ

高幸

更なる 日か づりも 水心 美

寒如

柏葉も 秋の 雲 龍も 後川

五雲

右も 黄 昏 暈も 五月 雨

桐藿

歌本も の 花も 種 芽も 本も

器水

後 置も 葉も 多し 水心 花

青湖

おの 佐も 名 月 尺 寸も 花

義市

忍明る庵連

峰も 花も 月も 花も 可る

年路









相獲一昔すもあやうきあやうき  
けかよふそとく細一鹿のきり  
あふさく花一色わくあつを  
稲村を小多のしり叶るうれ  
白も花も多し重くきき  
味うりの鳥憎子まきわさのそ  
初をわすれあふくし偉おし  
早んむしほさん行片と花那

射人  
義邦  
花明  
東翠  
聖路  
後有  
東強  
奉阜

葉のふれわをいん候一ハ陽長勢

石牛

前云

在法太夫

芭蕉えわあをききつるふれを  
日一たのき候をいんわ水俣花

水府  
文江

唱淋寄きあふり詠わ中とあき  
池水よあふもほまみからうれ  
早川よけあふむおあね一  
あ行わ叶るあうの街乃星

舟  
葉夢  
後川  
馬車  
車大



又掃り止かすとすもハ津木の葉

急文

正

冬の日をうけいりあしくそよわぬ花

楚流

江上あしく籠く初工の葉のまが

素膏

飛ぶをゆの端千やゆつさ角

泉花

そりやをわ曲折るいそ若とま

一晚

野をゆいや海もふ早のうけり頂

汁南

曙をう碑一書一寄一と籠

恭我

かころふ風のまゆく雲のれ

五心頃

我う家も中く廣一焼くくし

吳旅

一日をう入お静を葉摘うれ

波静

夕をうけいと捨くそまぬ坂をが

尺五

川も流の心地くす終郭一に

散氷

こりくくの明像違一一八重霞

乱羊

一行家のゆるみをまらゆ分が

呆我

行やまやの匹一や夕一くも

常後

まじりゆく映清やわ能のま

能瓜





古池の

静飛こも

水音音

做表翁画自今亭  
吳詠謹画

鳥巣のゆき色かきむねしき

喜林

今植の竹ふあおし夕涼

柳居

より乃山の花の木の間の花をか

鳥碑

ふんこを掃や山茶の花雪

方盤

ほけいこらとちりてはくはくは梅花

門庭

を折や人きりかひ掃の雪

巻所

巻一





泉意の吟

深色の松き山四つ保らるる雲

——北花樓

和歌とくちま披——多し船島

南川

栲木をくくする戸の音や白乃雪

楓人

ふきわたるる影も毛羨——ち

楚諾

肌あはれ木多し躬の衣衣

琴堂

能くみまはれり人も世中を

鯛餅

單の音くくする影の記 所より

希景

繁しわ花より外ふ心き——

仙泉

高はらひ繁もはれぬ瓢の如

花天

高きうらうら第一同舟ふ帯——了ふ

中精

投入くくする、おはらる帯——うれ

瓢船

高きふ、氷くくするわなつて

高路

梅の香わなつてふりしきり 凝りたる音

梅溪

梅もぬ おまのきわわなつて

交櫻

ほくぬ、桔梗をか味わくふの菊

鼓荒

あつた地くくするゆきくくする里の雪

花徑

字くくするのふり——ふきくする雪の舞

茂雪



柿をのこころいひらふ水はるる音 古珠

焚く物も若も蘇きつゝ底の露 千景

右引もゆるりそとすゝ 露のうたむ 芳杜

藤一わゆるりそとすゝ 露のうたむ 芳杜

五六河ふも傍るる露一う南 柏亭

重りくはははむ日や年一玄 眉端

すい〜〜〜の芽虫一が 梅月

けら〜〜〜の芽虫一が 捨毛

通夜の眼の力草一り梅のそれ 煙水

松先登初もぬ海う〜海岸が 芝人

中干わちききたきも〜唐錦 筆車

舞臺わ一羽と見つた岩の上 五溪

青きわ水も運ふ〜甘き香 波江

剛力のほろ〜物や〜清水が 且中

寂もつ〜〜唐錦も〜ぬ露も〜 玉麈

字も水の乾く河もる〜水が 草光

春も雨もふ〜〜まよひも〜 蘭陵

夏も〜涼〜〜〜水心花 秀普

集二





星合わ待得かきくも只一夜 風夕

野いおの陰のあまのけし子のあまのけし子 房旭

雲科ふ捨るまゝのけし子のあまのけし子 柙志

字あふ原の枕さくわ部さく 棚白

以きの啼のこしを喰まわ 抱雪

はつ橋のこしを喰まわ 抱雪

あまの年のあまのけし子のあまのけし子 白芝

柳甲わ明の所は寒くは 丁道

白の日の羽まひ軽なしきか 辛音

川いあふのあまのけし子のあまのけし子 白来

田いあふのあまのけし子のあまのけし子 東去

梅う枝のあまのけし子のあまのけし子 如夷

字あふのあまのけし子のあまのけし子 扇下

山さくをいあふのあまのけし子のあまのけし子 万壺

あまのけし子のあまのけし子のあまのけし子 這子

礎の中あまのけし子のあまのけし子 千老

芭蕉のあまのけし子のあまのけし子 雲白子

あまのけし子のあまのけし子のあまのけし子 峯山

浪





川松もゆりてわ伊勢かから時津風 巨流

世の中もゆりてわ花を旅 富山

わふそこのおし一筋わ終りのを 秋野

桜の香のをを南ぬる日か 五原

いらりた出まふ所の熱わ少雪のら 水曉

諸戸のく飛く雪一若代田 畔路

我孫の瓢 樽りく花やうる 志棟

見らりしよ山のわくま田植うふ 菜子

常のふも為葉子新 羽ぬきる 蓮朝

右原のうらうら出の原わ夕暮るん 雪見

まうし想ん一峰も嶺まへ秋の雪 沿原

まぬわんふ知るまぬ情を 楚蘇

女川もを流しく冷き草一が 左右

尾肝もまをい神たく想うふ 遊之

始葉わ少田川 遠も光れ時 河津

まもくこまの風をわ雪中 亀峯

丸木橋 遠近一も毛氷うれ 蕨青

まもわ雪も甘く僅も千年家 鉾田杉下

最上





清持く前ハハるる蓮のくれ

南才 薙徑

秋多川ハ水のせりきハ軒一葉

山久

虫蟻ハハ紙傍ハ喜の雨

龍尾

空也君を照く虫ハ紙衣ハれ

純子 祀孝

雪ハ白い競ハ梅花ハ枝

松年

山風の蔭長く言ハ小曲可る

其包

梅さくハ雪ハ法ハ旭ハ春ハ秋ハ

樹牛

かハ雨ハ帝ハく病ハ怪ハ

志之

花ハ秋ハその春ハハ秋ハ春ハ

大如

炭焼のハハ白ハるる雪ハ秋ハ

羽生 相舎

葉ハハ羽ハハ梅ハハ秋ハ

其水

碎ハ石ハ月ハ秋ハハ秋ハ

三布

次ハ石ハ秋ハ軒ハハ秋ハ

電耳

ハ多ハ秋ハ神ハハ秋ハ

佐石

刺ハハ秋ハハ秋ハ

祇中

鳥ハハ秋ハハ秋ハ

律杉

ハハ秋ハハ秋ハ

泰里

ハハ秋ハハ秋ハ

須か 里桂

集玉



町をわき借こする旅路亭 忍 栄立

山崎の山に雲を帯わ高くとま 南 打

山中の月へ飛こむ陸うれ 雲 雨

岸の山に引付く暑うら 大 里

牛と越す川もあさき 金 本

雲の山をわきよも青く浮く居 五 葉

夕の山に雲をよきす 秋 石

浮き上の時代瓦を落さく 昌 飛

下を伝ふいらぬの指を梅の花 家 人

次止むと屋根をふるま 淫 鳥

はしをわ指いあす 女 糸

雲をわ 多 括

れのおの音 松 雪

葉を 久 樹

白 金 綱

御植の字 甲 童

赤く 夫 木

人の眼の布ぬ 金 儀





浮佛と身代りしつゝ時をうか

修徳

希

暁をえくく眠し暮のる

高崎

糸江

七夕のおまゝの初しつゝ一夜

常泉

水榭

ささげと毛子の似ぬ水うれ

白雲

仙里

無水の流るゝ稲子の住所

田伏

娯鳴

むしと宿ふ妻の日並や菖の露

高松

是橋

昔者も叶おるやういふこと

高松

其色

見遠し一十年の接穂や世の花

高松

文志

郭と急いばつゝとくくく

高松

本羅

かきけりよわれを結ぬ糸はえり

高松

市南

芝草や花未だ梅よ小すけり

高松

夜叩

ぬきをともし涼のよふかたは梅の虫

高松

明雲

高きれそ葉をよまらり一葉は

高松

棠子

化しつゝ動ふ梅のぬ花叩か

高松

枝白

如次ハ 誠 中を不後の月

高松

蟻則

きのよつゝつまはあらるもしき葉籠

東武

海光

地とけりお物の中ゆしきか

高松

長車

橋あやをくくくくくくく

高松

号尺



863  
89

14164

所縁する所の吟の享保久文の題より先づ改の吟今  
 高しかりしは備の思純るると捨て備一々  
 包済のありあへん一々歌詠と同き一諸君の  
 其常のありあへん一々歌詠と同き一諸君の  
 其常のありあへん一々歌詠と同き一諸君の  
 其常のありあへん一々歌詠と同き一諸君の  
 其常のありあへん一々歌詠と同き一諸君の  
 其常のありあへん一々歌詠と同き一諸君の  
 其常のありあへん一々歌詠と同き一諸君の  
 其常のありあへん一々歌詠と同き一諸君の  
 其常のありあへん一々歌詠と同き一諸君の







国立国会図書館 タイトル『もゝとせ集』 請求記号 863-89

ガラス使用